

---

# ガラスの靴

羅幻徒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ガラスの靴

### 【コード】

N2390P

### 【作者名】

羅幻徒

### 【あらすじ】

彼女は間に合わなかった。シンデレラ異聞。

大理石の冷たい壁に、杖を強かに突くような鋭い音が反響する。その音はけたたましく繰り返され、優雅で静謐な宮殿の雰囲気を十二分に掻き乱していた。しかし、そんな無礼を咎め立てする姿は一人として見られない。その音を数える度に、大広間でのざわめきが潮のように遠のいていった。

音の源は、女性の履いたガラスの靴だった。少し華奢が過ぎるかも知れないが、控えめながら見目麗しい面立ちが印象的と云える。

大広間で催されているのは、王家主催の舞踏会である。世継ぎである王子の婚約者を広く求めたもので、国中の貴族や名家が招待されていた。当然、事実上の主賓は妙齡の娘達で、財力に物を云わせた宝石の数々と豪華な衣装で舞い交わしていた。王子との親密なお目通りを虎視眈々と狙っているその瞳は、甘やかに浮かべた笑顔とは裏腹に貪欲な肉食獣の如く輝いている。

しかし、彼女は駿馬の勢いで大広間を後にしていた。レースと絹をふんだんに取り入れた可憐なドレスの裾をたくし上げ、急ぎ立てられているかのように階段を駆け降りてゆく。よく見れば、華奢な足に履かれたガラスの靴は床面を捉え切れておらず、いつ転がり落ちてもおかしくはない。だが彼女は、そんなことには頓着がないとでもいうかのように、階下を目指してひたすらに急いでいた。

そのとき、数度目となつた鐘声が響き渡った。闇に塗り潰された天井を弾かれたように仰いだ彼女は、自らを鞭打つように更に足の運びを速めていた。既に息は切れ切れになっており、肺は締め付けられるように痛んでいる。喉は荒い呼吸に渴いて、今にも燃え出してしまいそうだ。駆ける足は痺れに震え、倒れ込んでしまえば二度と立ち上がることはできないだろう。

だが、それでも彼女は走らなければならなかった。あの鐘の音が途絶えてしまえば、魔法は消えてしまうのだから。

彼女は、平たく云えば招かれざる客だった。王家からの招待状に並んでいたのは義姉達のやけに仰々しい名前だけ。彼女は、年頃の娘として認識すらされていなかった。

実母を亡くし、継母が家を牛耳るようになって以来、彼女は奴隷と変わらぬ生活に身をやつしている。女中ですら質素だが清潔な部屋と身綺麗な服を与えられているというのに、彼女には囲炉裏の傍に積み上げられた藁のベッドと、継ぎ当てだらけの服が全てだった。そんな彼女の存在を、王家が知り得るはずもない。

しかし、彼女はどうしてもその舞踏会に出席しなかった。母が存命の時には、名士一家の総領娘として何不自由なく暮らしていた彼女である。とはいえ、舞踏会などの絢爛豪華な世界とは無縁であり、彼女自身もそんな世界に興味はなかった。それほど、父と母の愛情に包まれた日々は満足し切っていたのである。だが、今の彼女には何も無い。何も無いからこそ、夢想だけが心の支えとなっていた。あわよくばの野心がないと云えば嘘になるが、そう思うことだけがその一日を受け流すための慰めともいえた。

そんな彼女にチャンスが訪れたのは、舞踏会が始まって一刻ばかりを過ぎた頃だった。燃える囲炉裏の火に頬を伝う涙を乾かしていた彼女の前に、初老の魔女が現れたのだ。魔女は灰と煤にまみれた彼女を優しく見下ろしながら、舞踏会へ行きたいのね？ と尋ねた。そう率直に訊かれては、彼女に体裁を繕う暇などあったものではない。すがりつく思いで魔女に頼いて見せたとき、彼女の乞食のような服はえも云われぬ光沢を放つドレスへと変化していた。驚きに頬を紅潮させた彼女を認め、魔女は云った。

あなたは間違はなくプリンチペに見初められるでしょう。だけど、覚えておいて。私の魔法は、十二時の鐘が鳴り終わるまでしか続かないの。だから十二時には、必ずお城から出ていてちょうだいね。

魔女に手ずからガラスの靴を履かせて貰った彼女が、一考する間もなくその約束を守ると誓ったのは云うまでもないだろう。

既に鐘は、十一度目の響鳴しを轟かせていた。大鐘楼の鐘は音が長く響き続けるので、たった十二回にも随分と時間がかかっていた。彼女にとっては勿怪の幸いではあったが、走る彼女自身からそんな余裕は早々に消え失せていた。しかも、残りは既にたった一度きりなのだ。

宮殿はとにかく広がった。迷うことこそなかったが、ガラスの靴は普通に歩くだけでも難儀を要する物であり、その靴で走るなど論外でしかなかった。よくも舞踏会の中心で王子と踊っていたものだ、と今更ながらに思うばかりだが、預けていたのは掌だけでなく、身も心も全て委ねていたのが功を奏したのかも知れない。鐘が鳴り始め、王子が逃げるように身を翻した彼女を執拗なまでに引き留めた時、初めてその不安定さに驚いたほどだったのだから。

魔女は、魔法は鐘が鳴り終わるまでしか保たない、と云っただけだった。鳴り終わった後にどうなるのか、は云わなかった。余りの奇蹟に有頂天になっていた彼女は、確かめることさえ思いつかなかった。けれど容易に想像はつく。鐘が鳴り終わってしまえば、乞食同様の姿に戻ってしまうのだろう。しかも、この贅を極めた宮殿の中で、だ。

血の気が引くような感覚を味わいながら、彼女はひたすら階段を駆け降り、踊り場を走り抜け、再び階段を飛び越えていた。

その時 十二回目の鐘が荘厳に鳴り始めた。

思わず足を止めた彼女は、呆然と真っ暗な天井を見上げていた。

昼間ならば、圧巻なばかりの天井画に息を飲んでいただけだろう。しかし、今は何百という蝋燭の灯火さえ届かないまま、墨のような夜の帳に塗り潰されている。彼女自身の目には、見えるものから見えざるものまで、何一つ写ってはいなかったが。

残響に肌を拭われた彼女は、我に返って走り出した。今まで絹のソックスのように肌に馴染んでいたガラスの靴が、何故か鉛のように重く感じる。それでももう立ち止まることはできない、と足を押し出したその瞬間　ガラスの靴が、するりと踏み込もうとした足から零れ落ちた。

あ、と思った瞬間にバランスを崩したその躰が、階段の途中でふわりと宙に投げ出される。落下する自分の躰がゆっくりと、酷くゆっくりと残り数段となった段差を落下していく。爪先が急に冷たくなったと思ったら、その冷気が脚を舐め、腹部を固め、胸の膨らみを這い上がっていた。

何事かと俯いた彼女が見たものは、ガラスの靴のように透き通っていく自分の躰だった。波打つ豊かな髪ですら、ガラス細工のように固まっていく。

驚愕が声になる間もなく、彼女は頭から飛び込むように床に打ちつけられていた。髪が、細い首が、胸が、手が、足が、大理石に打ちつけられて粉々に散らばっていく。

幾多の蝋燭の光を受けた破片が、星空のように煌めいていた。けれど、その中で一番の輝きを放っているのは、彼女の足から零れ落ちた片方のガラスの靴だった。

静まり返った階段を駆け降りてきた王子が見たものは、床一面に散らばった大量のガラスの破片だった。何事だと訝りながらガラスを踏みしだいた王子は、階段の端に転がっているガラスの靴を発見する。

小さなその靴を手を取った時、階段を降り切ったところに立つ人影に気がついた。背中を向けてはいたが、先まで手を取り合ってしまった女性だと判る。思わず相好を綻ばせながら触れた肩先は、まるでガラスの靴のように冷たかった。

私はあなたに相応しくない女です。

そう云った彼女は、自分はしがない町娘の一人だと語り、継母や義姉が舞踏会に招かれたのが羨ましくて紛れ込んだのだと明かし、寄り合い馬車に乗って帰るはずだったが遅れてしまったのだと続けた。そして、全てはあなたを愛してしまつたために、と添える。

王子は、俯いたまま肩を小刻みに震わせている彼女の正面に回つた。そうして迷うことなく跪くと、ガラスの靴を彼女の足下へと差し出した。躊躇いを見せた彼女が、頬を赤らめながらドレスの裾をたくしあげる。そこには、片方だけガラスの靴を履いた小さな白い足が並んでいた。

その足にガラスの靴を履かせた王子は、立ち上がるや彼女の皇かな手を取った。その指先を確かめるようになぞり、小さな爪の一つ一つに唇を落とす。それから彼女の顔をまっすぐに見つめて、愛の言葉を囁いた。

ぜひ、私と結婚して欲しい。

驚きに引き結ばれた唇が、まるで花が開くように綻んでいく。王子がもう一度指にキスをすると、彼女は呟くようにこう答えた。

ええ、喜んで。私のプリンチペ。

(後書き)

ご精読アリガトウございました。

ご意見・ご感想・ツッコみなどは遠慮なくお願いします。

ちなみにプリンチペ (principe) はイタリア語で”王子”のコトです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2390p/>

---

ガラスの靴

2010年12月31日22時40分発行